



Title	ある回心の軌跡 : 両次大戦間のジュリアン・グリーン(3)
Author(s)	原田, 武
Citation	études françaises. 1988, 23, p. 23-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93682
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ある回心の軌跡

——両次大戦間のジュリアン・グリーン(3)——

原 田 武

- 1 信仰のよみがえり
- 2 「どうしても祈ることができない」
- 3 仏教への傾倒
- 4 ユンク思想との出会い
- 5 「人間」イエス
- 6 回心前夜の屈折
- 7 聖女カタリナの『煉獄論』
- 8 愛とゆるしの神
- 9 悪魔の後ろに神がおられる
- 10 つねにたたかいつづけること

1

「24年から36年まで、私は幸せのなかをころげまわっていた。そんなことが私に恐怖を引き起こす瞬間もあったが、すでに宗教的な不安が拡大しつつそこにあった。こんなことのすべてには解きほぐせないものが沢山ある。神への欲求が不在であったことは一度もなかった」(74-11-11)^①。
「1928年から、私はもうほとんど祈らなかった。1933年に祈ろうとしたが、祈れなかった。ついで37年に少し祈れるようになった」(41-9-28)。「私もまた、1933年には祈りの言葉を口に出せなかった。指に数珠を持って、ひざまずきはしたが、それだけのことであった。[……]頭にある祈りを自由に音声にするには、なお3年待たねばならなかった。それは、私がほかのところで語った状況のもとで起こった」(55-5-11)。

ジュリアン・グリーンは、『日記』のあちこちで自分の「非宗教的」な時代について語るときにはいつでも、教会から離れてはいても、心につねに信仰への欲求を感じていた、と強調するのがつねである。「祈ろうとして祈れなかった」この時期、神への願いと抑制とが微妙に交錯していたのであった。

「両次大戦間のジュリアン・グリーン」について、これまで2回^②若干の検討をこころみてきた私たちは、回心の問題を扱うのに先立ってまず、神を求める気持ちにみたされていながらも、なお踏み切れずにいるこの時期の錯綜に少しでも近づいてみたい。たしかに、「こんなことのすべてには解きほぐせないものが沢山ある」にしても、このような屈折こそが、作家グリーンを解く重要な鍵となりうるのである。

前稿でもふれたように、1932年『漂流物』を書き終えたころからグリーン^③の心に一つの転機が生まれる。『日記』でみる限り、この傾向はしだいに強まり、このころの記述は概して暗い。1929年のあの大転回からまだ日が浅いとはいえ、手放しの現世賛美はやはりグリーンには属さないのだ。

おそらく、教会という束縛を離れはしても、快楽に身を委ねること自身が実はもう一つの拘束、「もっとも苛酷な隷従」⁽³⁾になりうるという事実^④に、彼は思い至ったのであろう。自由とみえたものは自由どころではなく、快楽もまた人を取りこにする。「それ自身で一個の目的であろうとする」のが快楽の本質であり、それもまた多くの人々が仕える一つの「絶対」、むしろ「絶対の猿まね」(37-8-15)なのである。35年9月1日のつぎの記述は、肉体的な快楽に裏切られたことでの途方に暮れた気持ちを、よく伝えているように思う。

「私もまた、解放を、あらゆる手段での解放を望んできた。私は飽満がそこへ導いてくれるものと思っていた。だが違っていた。それは計算違いの最たるものであり、鎖がもっと頑丈になるばかりなのだ。そしてそれを

断ち切ることは、私の力を越えることに思える。では、どうすれば？」

1932年から33年にかけての時期、死についての言及が際立ってひんぱんになるのも⁽⁴⁾、教会という庇護を離れたことでの不安に関係があるろう。ひとり裸形にされたたましいは、死について、あらゆる角度から思いめぐらさざるをえないのだ。グリュックの音楽を聞いて「死の魅惑」を感じたり(33-1-16)、「生は部分的な死の連続である」との感慨を抱いたり(33-2-9)、あるいはまた死を一つの目覚めとしてとらえ(33-2-23)、人間は死ぬことで大きくなるのだ、どんなに卑小な人間でも死によって「知る」ことができるのだ(33-3-16)、と死の意味を認めるなど、死をめぐるさまざまな思索が『日記』を彩っている。死の観念にグリーンがどれほどとりつかれていたかは前稿で調べたが、たとえば32年12月24日の日付で「自分をカトリックと称しえたころは、死を恐れることがなかった」として、「少年期の信仰への、一種の決別ともいうべき私の小さな『パンフレット』が、いわば私をむきだしにしたのだ」と語っているのは重要であろう。そのときからあと「〔彼〕の書くもののすべてに、死の恐怖が現われ出た」と、彼はいうのである。たしかに死への恐怖は、快楽の世界に踏み込んだことの報酬あるいは結果であろう。神の手を離れた者は、楽園を出たアダムのように、世界の美しさと死の恐怖を、同時に見出すことになるのだ⁽⁵⁾。

しかし、死についていかに多様な考察を凝らそうと、人はついに死の恐怖から自由であることはできない。彼のうちに消しがたく残るこの恐怖に対して、やはり教会が最終的な解答を与えるしかないのであろう。後年の彼が書く「〔受肉という〕喜ばしい秘義」こそが、「光を隠す黒いカーテンを排するように、死の影を除くのだ」(75年クリスマス)という思いこそ、彼にとっての基本的な拠り所なのであろう。

むろん、この時期の暗さは、当時の緊迫したヨーロッパの情勢と無関係ではない。ヒトラーの権力掌握がついに実現するこの時期、ヨーロッパの危機をどう回避するかをめぐって、文学者の世界も政治一色で塗りつぶさ

れた観があった。このころ、ベルナノス、モーリアック、マリタンといったカトリック系の人々が何らかの形で多少とも時代の問題にかかわったのに反して⁶⁾、グリーンばかりは少しも立場を表明せずにいる。与すべき立場を見出せなかったうえ、何らかの党派に属すること自身、彼がもっともこだわっていた「自由」の理想に反するのであった。「自由な作家は、右の、あるいは左の独裁を引き受けることができるであろうか。〔……〕今私たちに示されるもろもろの綱領のなかに、私は自分にとって良きものを何ら見出せない。〔……〕考えれば考えるほど、今形成されつつあるヨーロッパ情勢のなかに、自由な作家がその位置を認められないということが、私にはよくわかる」(32-11-19)。

それに、快樂にとりつかれた自分の生活が教会の理想といかに背馳するかを切実に感じていたグリーンにすれば、今社会が不安に満ちているからといって、直ちに教会の保護にすがると、耐えがたいところであった。自分自身の問題を外部の既成の基準によりかかって解決する安易さを、極力避けようとするのがグリーンの身上なのである。

しかし、戦争の危険がしだいに高まっていくこの時期、ひとり孤立と不安に耐えねばならない重圧が、強く心にのしかからなかったはずはない。それは外部的な行動にあらわれなかった分だけ深く奥によどみ、内面化、抽象化されるように思われる。今後、39年春のカトリック教会への決定的な回心へ向けて、さまざまな屈折が内面に渦巻くなかで、この点での不安が基調を成していくことは、やはり疑うことはできない。それは人間の文明のもろさや、人間をとりまく絶えざる危険の自覚として、さらには外部世界一般の弱さ、希薄さの意識とさえなって、のちにみるような仏教思想や、ユンク的な精神分析の考え方を受け入れる基盤を作る。作品のうえでも、『幻を追う人』につづく『真夜中』も『ヴェルナー』も、この種の不安と緊密に結びついている。グリーンの回心に向かっての歩みは、それが戦争の危険、したがって一つの終末の脅威のなかで進行するという事実を

抜きにして、語ることはできない。

死と戦争についてのこのような恐怖や不安に比べて、はるかに日常的なレベルだけれど、このごろグリーンが三回にわたって(33-10-26, 33-10-28, 34-3-14), 何かの《imprudence》によって感染したかもしれない病気, おそらくは syphilis について, しきりに悩んでいることが私たちの注意をひく。たぶん無根拠のままで終わった, まったく個人的な強迫観念だけれど, 「この種の特殊な恐怖に苦しまなかったものは, 私を裁くことはできないだろう」とグリーンは書く(34-3-14)。母の兄弟ウィリーを廃人同様にしたこの病気に対するおそれが, グリーンにおいてどんなに大きかったかはいうまでもない。『人みな夜にあって』の一人物はこの恐怖から, 検査の結果を待たずに死ぬ⁽⁷⁾。33年10月28日の記述には, 「ほぼ一週間のあいだ, 私はかつて経験しなかったほどの苦悶のうちに過ごした」とある。

若いころ, 街に行く娘たちがみなこの病気の萌芽を身にたずさえているようだった, と彼は書くが⁽⁸⁾, 彼が女性を忌避するにいたった原因の一つに, この点をあげることができるかもしれないのだ。問題が肉欲と快楽というグリーンの根本的な関心にかかわっているだけに, この苦しみの意味するところは大きい。これはもしかして無言の警告かもしれず, ここに快楽の道に踏み迷うことの, もう一つの危険と障害があるのだ。33年10月26日には祈ろうとしても, こんなときどんな神に祈ってよいかわからない悩みが語られ, 一日おいた28日には, 苦しみにうちひしがれていたとき, 誰かが部屋にいて, 力強い威厳と深いやさしさをこめて語りかけるのを聞いたという, はなはだ神秘的な出来事があり, さらに翌34年3月14日の記述では, 道すがらサン・シュルピスの聖母マリアの礼拝室に駆けこんで, ひざまずいて力を乞い求めるところが述べられている。このように, 病気の恐怖についての三回の記述が, いずれも宗教あるいは神秘の次元にかかわっているのは, けっして偶然ではない。このような有無をいわせぬ形をと

って現われる肉欲の恐怖には、人を超自然に向かって踏み出させる衝迫力がそなわっているであろう。

これらいくつもの事情の重なりの中かで、とくに34年にはいって、本格的な信仰、少なくとも生活を全面的に改めたい願いが、繰り返し『日記』にみられるようになる。6月14日にはヨハネ福音書を涙で字が見えなくなるほどの感動をもって読み、自分のもっとも深いところに噴出を待つ、一つの泉が存在するのを確かめたことが書かれ、少し先の9月3日には、ためらいながらも、「キリストへの本当の愛」が自分のうちにあることが表明されている。10月はじめごろの数日間、彼の生涯で何回かあった強い宗教的な苦しみ⁽⁹⁾の時期の一つにおそらく見舞われたことが察せられ、いくらかでも生活の方向を変えることが可能かどうか、アヴァンチュールの数を減らそうとするより、むしろこれをまったく止めることができないかどうか、しきりに自問している(34-10-3)。

真の信仰を回復したいと願うにつけ、グリーンの心に、かつての少年期の純一な信仰心がなつかしく思い出されるのも当然であった。昔よく来たことのあるサン・ジュリアン・ル・ポーヴルの小さな聖堂にはいっては、「十六歳の宗教的熱情」に再会したように感じ(34-10-5)、『聖フランチェスコの小さき花』を読んでは、自分もまたこれらの小さな兄弟たちと同じ喜びを味わったことがあるのだと思い返す(34-11-25)。「これらすべてを否認して、私は得るところが大きかったのか。人間としては値打が増しただろう、たぶん。しかし、霊的には？」(34-5-2)。危機にあるとき、心に過ぎた昔への悔恨がまじりこまないことはない。それに、少年期あるいは無垢への郷愁は、グリーンの基本的なテーマの一つでもある。

2

自責と悔恨にさいまれながら、宗教への傾斜を深めていたこのころのグ

リーンに、一つの大きな事件が起こったのは、同じ34年の11月であった。11月24日の記述によれば、何日か前の夜、ひとり部屋にいたとき、いきなり説明できない衝動にかられ、まるで誰かに押し倒されたように、彼は窓のそばにひざまずいたのであった。「一分近くのあいだ、私の後ろに誰かがいたのであった」。その前夜、何か捜しものをしていて、引き出しにロザリオをみつけ、ふと「主の祈り」を称えようという気を起こした。しかし、いくらロザリオを手に「主よ……」と口にしても、もうあとがつづかないのであった。「どんなに努力を払っても、一つの音も私の口からは出なかった」。押し倒されたようにひざまずいたという事件は、その翌日のことである⁽¹⁰⁾。

もともと神秘家的素質を多分に持つグリーンのことであるから、その生涯で超自然にかかわる出来事はめずらしくないとはいえ⁽¹¹⁾、たしかに不思議な事件であり、彼が「何か月も何か月もためらった末」(70-2-16)、その記述をようやく新版の日記『容易な歳月』(1970)に収めたのも無理はない。「これを不謹慎だとしてとがめる人もいるだろうし、利用する人も少なくないかもしれない」(同日)。それにしても、32年ごろから彼の内面に高まる信仰心の、これが一つの到達点であるとともに、以後に大きな影響を及ぼす「〔彼〕の生涯の曲り角の一つ」であることに間違いはない。『容易な歳月』でわざわざ脚注をつけ、このとき部屋の窓を飾っていた黄色のカーテンを、記念に永く保存したことを語っている。

だが、この事件の問題点はやはり、彼が「祈ることができなかった」とにかかっている。「この日以後私の人生は変わった、とできればいいところだ。でも、この日記のつづきが示す通り、私は4年待たねばならなかったのである」(脚注)。「私はよりよき人間にされるよう神に求めて、祈ろうとつとめた」(34-9-20)だとか、「部屋までもがときどき奇妙な姿に映るぐらい、自分のなかで大きな変化のあるのが感じられる」(34-11-16)といった、この時期の相次ぐ発言をみると、彼の立場は事実上、信仰

者のそれだと思いたくなる。しかし、決定的な回心は39年の春まで持ち越される。彼としてはなお、信仰者と自称するのをためらわせる何かを心に感じつづけていたのであった。自らを安易に信者とは認めずにいる、そのその自責、そのきびしさこそが、本当は、真の信仰への養分となりうるのであろうが。

グリーン自身として、これほどまで踏み切れずにいたのはいったい何によるのであろうか。私たちは、なお内面に立ち入ることにしよう。

神秘家であるのとまったく同時に放蕩者であるのが、グリーンのグリーンたるゆえんであるから、肉欲の問題がここにかかわるのは察せられはする。しかし、「自分がこれほど肉感的であるのを大いに悔いる」(33-1-24)とか、「おそろしい欲望、私はこれをいかに憎むことか……。それは、肉体の幸せ同様、表現のできない苦しみのだ」(34-8-4)といったように肉への傾斜にはげしく反発しながらもなお、この期に及んで、ここから抜け切れない自分を率直に認めているグリーンをみると、この誘惑が彼においてどれほど強かったか、驚かざるをえない。「私は肉体の愛なしにすまずことはできない」(33-1-24)。「私は私の存在全体が肉体の幸せに恋いこがれているを感じる」(34-7-30)。肉が憎むべき隷従にほかならないことをよく知りつつも、彼はここから逃れることができない。ここでもまた、グリーンのうちの放蕩者が、想像以上に根強いことがわかる。

34年11月の神秘的体験の直前ですら(34-11-6)、福音書を読むことが、快樂がやはり役割を演じている生活のなかでは、どうしても矛盾としか思えない悩みが語られている。どうやってみても、肉体かたましいか、どちらかが苦しまざるをえないのである。この体験のとき彼が祈ろうとして祈れなかったのも、「自分が偽善者だと感じる効果なくしては、新約聖書を開くことができない日がある」という述懐に照らして、いくらか説明がつく。前にもふれる機会があったように、ここでの障害はまた「性の問題に

ついで、福音書の沈黙」(33-3-29)という点にもあった。

いうまでもなく、「信仰」について語るとき、その意味内容をはっきりさせなければならない。絶対者の措定や、人間の不完全さの実感に発する基本的な信仰心なら、このころのグリーンにもありあまるほどあったし、新約聖書でのイエスへの共鳴も、彼がしばしば口にするところである（教会から離れていたときでも、聖書を読む習慣は失わなかったことは、『日記』のあちこちから察せられる⁽¹²⁾）。むしろ、そのような信仰心が人一倍強いからこそ偽善の意識が高まり、それが最終的な決断へのブレーキとなっていたのである。しかし、信仰というものをキリスト教の枠組みの全面的な承認、あるいはカトリック教会の一員たることの同意と解釈した場合でも、このころのグリーンはなお釈然としないものを残していたように感じられる。のちにもふれるけれど、彼には、いわば実証的に人間イエスをとらえようとしたエルネスト・ルナンへの関心や、制度化された教会に対する屈折した感情があった。あまりに壮麗なカトリック聖堂へのとまどいは、35年春のローマ滞在のときにみられる。ピエトロ寺院では、「駅の間と同じぐらいにしか心を動かされることがなく」、巨大な丸天井のもとで、むしろ「反逆的な心」を持ち歩いたという(35-4-11)⁽¹³⁾。

つまるところ、あふれるほどの神への思いが、いくつかの抑制に出会って空しく渦巻いていたというのが、このころの彼の内面の図絵である。それらの抑制は神の思いに屈するほど弱くはなく、神への思いもまた抑制に負けるほどもろくはなかった。上にも少し引いた34年3月14日、病気の不安に苦しめられていたころ、サン・シュルピス聖堂で述べた「祈り」は、「私は自分で守れない約束はしません。私には断念できないことがあります。私はただ「力」を受け取りたいだけなのです。これほど正当な恵みを求めるどんな人間にも、天は拒否をさしむけることはできないはずです」と、良心的とも、いささか身勝手ともとれる複雑な胸の内を明かす。そして翌年2月16日の、次に訳出する一節では、はげしすぎる欲望のために容易に

神に近づけない苦しさの吐露とともに、規定の勤めを果たすだけですべてが許されたと信じる従順な信者や、習慣となった儀式への反感と皮肉さえ、読みとれるように思える。追い詰められた形のジュリアン・グリーンは、いわば開き直って、肉を拒否しないとまでいいきるのだ。このときの彼には、無造作に教会に従ってしまわないきびしさの方が、自己に対する忠実さのしるしだと思えたのであろう。

「心を改め、司祭の足もとに身を投げ、自分たちをわずらわせ苦しめるものすべてから身を解き放つことができると信じる人々、私は彼らを卑怯にも羨むことがある。私には、そんなことは不可能だ。それは、いささか汚らしいことにさえ思える。僧衣をまとった男にすべてを打ち明けたからというので自分のしたことがご破算になったとみなすこと……。いやだ。おそらく、肉が私たちにもたらす喜びや悲しみを拒否することがよくないのは、生命を否認すべきでないのと同様なのであろう。厳しさもなく、へとへとになるたたかいもなく、うまく欲望を眠らせて高みに登る人々の、何と幸せなこと」

3

しかし、グリーン教会の離脱の期間が多少の起伏を伴いながらも10数年の長きに及んだこと、もともと彼の内面が多様な精神性の冒険の場であることを考えれば、問題はもっと広い視野でとらえねばならない。

前稿で私たちは、死の理解から出発して、非現実なものに動かされやすいグリーン資質について言及した。夢、回想、突然の幸福感、音楽、絵画など、日常的現実の「彼方」に私たちを連れ出してくれる広義の非現実的な体験が、ときにはいわば疑似宗教の役割をつとめる可能性を持つのであった。「かけらほどもキリスト教徒でない私であっても、〔「怒りの日」のような〕不可視の世界の存在を宣言する歌声には感じやすかったのだ」(I, 869)と語る『もう一つの眠り』の主人公に作者ははなはだ近い。

もともとの世の非現実感は宗教感情ときわめて結びつきやすく、1930年代のグリーンを特徴づける仏教思想への関心がはいりこむのは、非現実の方がむしろ強く存在するかのような、彼の感じ方によってであろう。

彼の書いたものからみる限り、仏教についての言及は1928年12月にはじまる。彼はこの日、Barthoux コレクションの展示で Bodhisattva の大きな頭部を眺め、超人間的な知性をたたえたようなその目鼻立ちに、いたく心を奪われる。この日の印象は、約2年後の31年2月7日、やはりある展覧会で見たブッタの表情の描写と比べてみると興味ぶかい。はじめ漠たる超俗あるいは高貴さと見えたものが、ここでは「世界からの絶対的な解脱」「ペシミズムをまじえた英知」と明確にされ、彼は周囲のすべてが無化されるほどの夢に沈むのだ。

仏教への関心はとくに、宗教的なものへの情熱が強まる34年に際立つ。この年、仏教あるいはインド哲学一般への読書を重ねたことは、『日記』のあちこちから知られ、あるいは「おまえは神なのだ」という Krishnamurti の言葉に強くひかれ (34-10-3, また10-20も参照), あるいはインドの宗教歌 Bhagavad-Gita の一節「かつておまえが存在しなかった時は一度もない」が、心に「大きな強い光のような効果」をふるったと述べている。「私は〔仏教から〕多くを、巨大なものをさえ期待している」(34-10-3)。

グリーンがこれらの読書から学んだものの文学的な形象化は、いうまでもなく『真夜中』(1936年出版)である。「エドム氏は一種の仏教徒である。実際のところ、彼は、いくらか私が自分で語るであろう通りの話し方をする」(35-11-5)。もと修道院の、崩れかけた城館で小人数の仲間とともに、夜と昼を逆転させた生活を送る、この教祖ふうの人物は、たしかにキリスト教とはかなり違った生き方を語る。物質と所有を拒否し、現実をまぼろしだと思い定めて、「幸福な無関心」に生きよ、というのがその主旨なのだ。すべてはほかのところにあり、「死や病気や愛の幻滅、破産、そうした悪夢のどれ一つとして真実のものではない」。私たちは、見えざるものへの感

覺を身につけ、悪夢から覚め、たましいが飛び翔けるのにまかさねばならない。もともと人間は、自分が誰であるのかを知らないであるから（Ⅱ，593-606）。

このようなエドム氏の発言を、「私はしばしば、存在しない世界、あるいは私たちが想像するような仕方では存在しない世界に住んでいるのだという束の間の印象を持つことがある。おそらく物質世界は、シンボルの価値しか持たないのであろう。この観念は十五歳のころから私には親しい」（33-9-8）というグリーン自身の言葉と比べれば、グリーンがこのような意味での仏教思想に、どんな近いところにいたかがわかる。また、若くして超脱の物語『地上の旅人』を書き、終始修道生活への漠たる夢を心のどこかに持ちつづけてきた彼にとって、物質的なものの断念、より高次の靈的価値の受容といった理想は、そのまま彼自身のものであった。人間は自分が誰であるかを知らないという考えにしても、自らの不可解さに貫かれて生き、「自分というこの未知なもの」（62-3-19）が彼の主たる関心事であったことからみて、けっして彼に無縁な思想ではない。

このように、彼と仏教との接触は、むしろ自分のうちにあるものの再認識という一面を持つが、彼が新しく心を打たれたのは、一つには人間が神になりうるということ、もう一つには一人一人がどの時代にも存在したという教えであろう。世界の非現実性の自覚のなかで、自己を滅却し、絶えざる修練によって、もっとも高次の解脱に至りつくとすれば、日常の片々たる苦悩など問題ですらなくなる。人間が神たりうる素質をそなえているという発見は、これまでとはまったく違った広大な視野で、小さな自己をみる見方を啓示したのであろう。

もう一つの、個人の繰り返しの生存という点については、『真夜中』に次ぐ『ヴァルーナ』で「輪廻」思想として、小説の筋のなかに組み込まれる。1939年の回心をはさんで書き進められたこの作品では、キリスト教的な解釈が微妙に重なるけれど、これは実質において仏教という生まれ変わ

りの物語である。一人の個人が時代を隔てて何回も生まれ変わるという教えは、ギリシャの昔から西欧でも多少はみられる、たしかに意味するところの多い思想であろう。悪人の繁栄、善人の不遇という人間古来の疑問も、同一人の永い連鎖を措定すれば説明しやすくなり、一つの生がえてして不可解なまでに短く、不完全なものも進んで受け入れることができる。輪廻思想は人間の不死への願いや、「運命」を解き明かしたい願い、反復と復活への期待に応える。これらの疑問と願いがかなりの部分、グリーン自身のものであったことを思えば、彼が「キリスト教が口をつぐむ場合でも、私たちの難問のいくつかに対して仏教は魅力的で、妥当と思える解答を差し出す」(34-6-11)と考えたくなるのもわかる。「転生、私はこれを喜んで信じたいぐらいだ」(同日)。輪廻思想の意味をさらに追うなら、一人一人が「前世」で別の誰かであり、今後も別人になりうるという前提は、人と人とのもろもろの相違や格差をやわらげ、そこから一つの平等と連帯の契機を形づくることもできるであろう。

生を仮象とみなす考え方の強化。キリスト教には乏しい「因果」の観念や、「解脱」による「仏」への無限接近の可能性の啓示。——仏教との出会いはグリーンの内面世界に、新たな視点を与えたことはたしかである。35年9月4日の日記で彼は、仏教の研究が自分のうちで何かを変えたかどうかと自問し、今では死ぬという思いに震えることなく直面できるようになったと述べている。生が仮象であることから、輪廻思想からも、死を虚妄とする見方は成り立つ。「死は存在せず、それは無知によって作り出された悪夢である」(35-12-20)というエドム氏そのままの言葉は、グリーンに以前からもあった、死を忌避しない立場に一層の裏付けを加えるものであろう。

しかし、仏教がグリーンにどれほど働きかけようとも、それが彼の最終的な救いを構成しないこともまた明らかである。グリーンはついに仏教徒ではない。死の問題にどんなに光を投げかけようと、彼の最大の関心事で

ある肉欲による締め付けという点になると、仏教の教えるところはどうしても少ない。もともと、霊と肉とのきびしい二元論的対立という発想自体仏教には乏しく、ひたすら欲望を抑え地上的なものからの離脱を説く教えは、たしかに深く心を引きつけはしても、これほどまで肉にからみつかれた彼には、ただちに自分自身のものとはなりにくかったであろう。

のちにグリーンが到達するようなキリスト教への理解から推し測ると、彼にとって仏教思想の問題点は、「神（仏）」の姿がここでは希薄にならざるをえないということであろう。人間が神（仏）たりうるとは確かに貴重な思想であっても、そのぶん神としての超絶性が薄められることになり、広大無辺な仏の存在は、キリスト教的な神の絶対性からみると、今ひとつ焦点と切迫さを欠いたものとなるであろう。

永い時間のなかで人間の幸不幸や善悪が釣り合っていくという輪廻思想にしても、いわば一種の合理主義的思考であって、神の意志の働く余地はどうしても少ない。繰り返しのない一個の生のなかで、義人が不幸をなめ善人が迫害されると考える方が、神の愛や正義について痛切に思いを凝らすきっかけが生じる。いかに神が不正にみえようとも、ここでは超絶的で人知を超えた「神」なるものが切実に対象化され、熱い対話が成り立つのだ。

回心の近づいた38年9月7日に、次の一節がある。仏教には絶対者の強力な意志（あるいは愛）という考えがなじまないことに、グリーンも気づいていたのであろう。「でも、どうして、どうして、こんなことになるのであろう。この問いに対して、キリスト教は神の正義は測りがたし、と答える。東洋は、正義も不正義もなく、原因と結果のおそろしい営みがあるばかりだ、と答える」。

のちにもみる通り、グリーンが決定的な回心にいたる契機の一つは、神の「愛」の自覚にある。愛恋の情を極力抑えて地上的な絆を弱めようとする仏教には、もともとキリスト教のような、一人の絶対者との緊密な愛と

いう観念を容れる余地は乏しい。グリーンが仏教に従いきれなかった理由は、このあたりにあると考えてよいだろう。

4

つまるところ、「インドはときどき良い種子が育つ毒麦の畑だ」(41-2-28) とみなし、輪廻思想を「現代の大きな異端の一つ」(同日) ときめつけるのが、グリーンの最終的な態度であろう。もともと彼はあらゆる種類の宗教性に深い関心を示す一面を持ち、最近では東方正教会やイスラムへの傾倒を隠さないが、仏教についてはこれ以後さして多くを語っていない。だからといって、仏教へのこれほどの没入が、ただ一過性のものに終わったとはいえないと思う。34年ごろの『日記』を読めば、仏教とキリスト教とがむしろ自然に彼の心のなかで同居していたことがわかる。二つはいわば相互補完的に、彼の霊性の高まりに寄与していたと考えられるのだ。36年12月21日、37年1月2日という『日記』の上では連続した二つの日付で、一方では Vivekananda の著作について、もう一方ではヘブライ語の聖書について、《Immense enrichissement》、《ces richesses immenses》と、ほとんど同じ表現をしているのも興味ぶかい。

仏教思想の一面であるこの世の非現実さという点について、グリーンは回心後もなおこの意識から抜けきっていない。むしろ彼終生のものであるこのテーマが⁽¹⁴⁾、その宗教感情に混じりこまなかったはずはない。彼のキリスト教思想が現世の軽視にともすれば傾きやすいとすれば、そこにはいくらかは仏教との接触がかかわりを持つであろう。そして、「永遠なるものという名が、かつて神に与えられたもっとも美しい名前だ」という断定(37-7-26) には、二つの宗教のもう一つの接点があるように思われる。

このころのグリーンが仏教的なものにひきつけられた基盤は、一方で彼がユンクの思想にただならぬ関心をそそられたことにも通じる。やはり34

年の6月1日、たまたま聞いたユンク博士の講演で、その集合的無意識の理論に彼は大きな感動を覚えたのである。博士はこのとき、現代の精神病患者の絵を例に、「私たちが自分のなかの深い無意識の奥に、あらゆる人間種族に共通な遙かな遺産にはかならない、いくつかの観念をたずさえている」ことを説得的に語ったのであった。「私たちは父母や曾祖父母から、こんなにも多くのものを受け継いでいる」。「私たちは、思い出で練り上げられているのだ」。

これに先立つ時期、32年夏にはスコットランドへ、33年終りから34年初めには祖国アメリカへ旅行したことが、この感銘の背景にはある。彼はあるいは遠い記憶が深いところから立ち昇る体験（32-8-9, 8-12）をし、またあるいは、ほとんど世界の始りから来るような、重い憂愁や沈黙（34-1-14, 2-4）を味わったのである。

何かにつけて過ぎた日々には思いをはせるのがグリーンの中の精神の一つの動性であり、場合によってそれは自分の経験しなかった過去にまで及ぶ。説明のつかない「既視感」がしばしば彼を襲うことは、『日記』で語られる通りであり⁽¹⁵⁾、遙かな昔に連れ戻される思いは、よく音楽によって喚起される⁽¹⁶⁾。ユンクの理論はこういった体験に、一つの裏付けを与えるものである。だが、この理論が意味を持つゆえんはまず、問題が広く人類全体のなかでとらえられている点にある。人間一人一人には全体に通じる「定数」が宿り、一人はいくらか万人でもあるのだ。この考えと軌を一にするかのように、数年ののちストックホルムでの体験が来る。北欧旅行のとき、この地の先史博物館の陳列品を眺めながら、「〔彼〕を通して、まるで大道を進むように、人類全体が通り過ぎていくような印象」を抱く。「人類はすべて私であり、私はすべて人類なのだ」（38-9-3）。

この講演が戦争の危険が迫った34年という時期に、またグリーンにとっては、仏教についての本格的な読書が始まる時期に行なわれたことを考えると、その意味ぶかさになおさら思いいたる。太古以来の人類がつねに共

通部分を保ちつづけてきたとする思想は、「おまえが存在しなかった時はない」という仏教の教えに近く、人間の長い連鎖のなかで個人が絶対性を失うところは、輪廻の観念を思わせる。それに、茫漠たる歴史のなかでは——しかも人間が基本的に同一部分を含むとされた場合——、あらゆる人間の営みは相対化されてしまう。この講演を聞いた日、グリーンが「ものごとの、まったく相対的でしかない持続」、「一切の壊れやすさ」について、考えこむのも理由のないことではない。ヨーロッパの終末が危惧されていたこのころ、その思いはまた格別な重みを持っていたはずである。

回帰、再生、反復、それにすべてのもののはかなさ。こうした観念が多少ともあらゆる宗教感情に付随するのはいうまでもない。人間の営みにあるこれらの要素を指示する限りにおいて、ユンク思想は宗教の見地で人間を見つめさせる。ユンク派の精神分析といういわば科学までもが、人類のもろさと相対性を教えているのだ。ユンクとの出会いは、グリーンのこのころの宗教感情の深まりという文脈のなかでとらえられるべきであろう。超絶者を模索する彼の心に、一層の拍車がかかったことは十分に考えられるところである。

ユンクの考えが作品にもりこまれるのは、先にもふれた『ヴェルナー』である。輪廻のテーマを中心にすえたこの小説はまた、ユンクの、個人の奥に宿る原初的部分の再現としても読める。小説の「主役」である鎖はアトランティスに似た、海に沈んだ太古の国で作られ、興亡を重ねる文明の数々を通して今日にいたる。物語は、ある瞬間自分の奥の、歴史の深部に引き戻される個人の姿を描く。まるで殻が破れたように、一人一人は深い同一性のなかに溶けこみ（海に沈んだ国は、無意識の奥に宿る太古の記憶であろう）、個々の愛憎もやがて全体のなかに混じる。

『ヴェルナー』が別して興味ぶかいのは、これが1939年の回心をはさんで書き進められたことである。このことで、キリスト教的な部分が小説に微妙に重なることになる。転生のしるしである鎖には悪のイメージが加わ

り、輪廻とみえたものにも、人間相互の連帯という性格が強調される。そしてこの連帯性は、グリーン自身が気づき⁽¹⁷⁾、マリタンやムーレルが追認するように⁽¹⁸⁾、カトリックでいう「諸聖人の通功」に対応させることができるのである。

このきわめて異教的な小説が、かえってこれらカトリックの立場から高い評価を得ているのは興味ぶかい。マリタンはグリーンに心のこもった手紙を送って「この作品がどんなに深い感動を与えたか」を語り⁽¹⁹⁾、ムーレルは「現在までのところ、私はこれをもっとも深くキリスト教的な小説とみなす」といいきる⁽²⁰⁾。これはたしかに、永い時間のなかでキリスト教が異教に勝ちを占める物語であり、無数の「人間たちの合唱」のなかで一人一人が神の愛にいざなわれる（ムーレル）のだと考えれば、輪廻というもっとも異教的な発想ですらカトリシズムに回収することができなくはない。「諸聖人の通功」が教えるように、死者と生者を含めた霊的な交流もまたカトリシズムの説くところなのだ。その点『ヴァルーナ』は、キリスト教思想のはばの広さを示すのだといえよう。

このように、『ヴァルーナ』を構成する多様性は、1930年代の中ごろ以後カトリシズムに少しずつ近づきつつあった一つの高度に宗教的なたましいのありようを、よく示している。輪廻の観念も、ユンクの理論も、キリスト教を含めた一個の異様な雰囲気の中に溶けこみ、そこからやがてカトリシズムへの収斂が生じるのだ。39年春の回心に際して輪廻思想が決定的に乗り越えられる事情はのちに検討するが、輪廻のテーマのうちにもカトリシズムにつながる部分は、多少とも伏在していたのである。

5

上にも述べたように、教会から離れていたころでもずっと、グリーンは聖書とくに福音書を読む習慣は失ったことがなかった。制度としての教会には割り切れなさを感じながらも、あるいは「祈る」ことは相変わらず不

可能であっても、イエス自身への愛着を彼は終始抱きつづけていたのであった。

32年5月から翌年8月にかけて書かれた小説『幻を追う人』は、この点私たちに教えるところが多い。この小説については前稿でもふれたが、治癒の見込みのない病気にかかり、死におびえ、現実の何によっても希望を見出すことのできない主人公マニュエルは、いくらかジュリアン・グリーン自身のように、信仰への反発とあこがれとの、微妙なたゆたいのなかで生きる。「人が死に隣りあっているとき、宗教はいかに重要性を失うか」を（Ⅱ，290）一再ならず痛感する彼は、もう祈ることはできず、「一つの誠実な心から出た言葉」として、神に向かって「ぼくはあなたを否認する」といい放つのだ（Ⅱ，328）。

そんなマニュエルも、その姪マリー・テレーズも、聖職者やカトリック教会に対して、陰に陽に不信の気持を拭いきれないでいる。少女らしい信仰心をうまく受けとめることができない修道女にしても、子供に一方的な約束を強要する神父にしても、ネーグルテールの尊大で得意げな聴罪司祭にしても、二人の心とけっして交わることはない。二人の方での偏見はあるにもせよ、彼らはただ慎重さや世俗的な知恵の教えか、強大な教会を背景にした自信をあらわしているとしか思えない。彼らに客観的に理があるかもしれない、相手との疎隔はあまりにも大きい。この二人ばかりか、盲目的なカトリック信者であるはずのマリー・テレーズの母でさえ、「僧服を着た人たちは好きでない」とされる（Ⅱ，298）。そしてマリー・テレーズは「〔彼女〕を悪から守ってくれる」老神父の足元に、そっと唾を吐きかけるのである（Ⅱ，258）。

この小説のテーマに「偽善」があることは、グリーン自身の注解によっても明らかである（32-9-30）。たしかにここでは、宗教を含めたブルジョワ社会にひそむ思い上がりや偽りが描き出されるばかりか（たとえば羅紗商人のエピソード，Ⅱ，304あたり），主人公たちにもどうしても偽善的な

部分がつきまとう。マニユエルはいつも自分を二重にして生きる。今はなくなった信仰を、人には依然持ちつづけているようにみせ（Ⅱ，327），自分を救うためにマリー・テレーズをすら裏切るのだ（Ⅱ，267）。そのマリー・テレーズもまた「心は瀆神の思いでかき乱されながら」，表をつくるべく聖体を拝領したりする（Ⅱ，259）。さまざまな事件をめぐる外見と本心，他人の見方と自分の見方との微妙なずれに，この小説の一つの魅力があることはたしかである。（もっとも彼女は別のところで，「私はときおり自問するのだが，もしいくらかの宗教的な偽善が私たちの悪しき本能を鎮めに来なかったら，私たちはどんなに残忍なけだものになることだろうか」（Ⅱ，213）と，はなはだうがった観察をくだしている。あらゆる種類の偽善でみちみちたこの世界で，宗教上の偽善ばかりが，とがめられることはないのかもしれない。）

しかし，マニユエルがいかに偽善者の名に値いしようと，彼にある潔癖さ，いつわりへの敏感さに注意を向けないわけにはいかない。今は失われた信仰をかえりみながら，「もはや信じていない宗教からの遺産であるもろもろの小心さが，ぼくの欲求をいつも途中でとどめるのであった。私は何にでも失敗した」（Ⅱ，306）と彼は書く。おそらく自分の偽善ぶりをもっともよく知っているのは彼自身であり，それが彼に冷静な目で周囲を眺めさせるのであろう。

それにしても，いかにすべてに失敗しようと，ひとつの信仰から「小心さ」(scrupules)が残るということ，これはすなわち，その信仰がなお完全には失われていないしるし以外ではないであろう。実際，彼が苦い思いで胸の内を語る二つの長い記述（Ⅱ，289-291およびⅡ，305-306）を読むと，キリストへの思いがなおも心にくすぶっているのを感じることができる。それも，超絶的なもの，高貴なもの，力強いものを取り除いたあとでの，「人間」イエスへの思いなのだ。たましいや未来の生について以前教えられたことは，今は「不条理な欺瞞」にしか思えないけれど，「その言葉で

人びとのたましいを魅了した、勇敢で善良だった小男」,「その人間性ゆえに偉大だったキリスト」の姿だけは残っているのである。

「キリスト教徒になってカトリックであることをやめた」と、マニユエルは書くが、「神」を除いたイエス自身への愛着はやはり信仰とは呼びにくい。それにしても、誰からも理解されない深い孤独のなかで、なおも共感と渴望をこめて、イエスを呼び寄せようとするマニユエルの姿は感動を誘う。ここには死に瀕した、よるべきな孤独者が最後に求める、いわば「無信仰者の信仰」がある。そしてある夜、周囲が寝静まったなか、ひとり苦しむマニユエルのそばに、誰かが訪ねてきたような気配がただよう。彼は、「甘美なさわやかさをおびた、燃えるような手」がたしかに額に置かれたと感じる(Ⅱ, 291)。悩める弱者のこれほどの呼びかけに、もしかして神たるイエスが答えを返されたのであろうか。

マニユエルを通じて私たちが知るのは、拒否のなかでも残り、断念のなかにも忍びこむ、信仰的なものの根強さである。「絶対」を求める心はこんなにも強いのだ。自分の卑怯さに舌打ちする思いであっても、「もう信じなくなった」ことを悔しがる瞬間が、マニユエルにはある(Ⅱ, 364)。人が激しい苦しみにあるとき、そして神が遠くに思えるとき、なおも「絶対」を求める心は、より近づきやすい人間イエスに向かうのであろう。対象がどんなに隔たっていても、その思いの激しさからいって、人間イエスを愛することは、神の子イエスを信じることと、そんなに遠くないのであろう。(マニユエルについていえることは、いくらかマリー・テレーズにもあてはまる。この手記を書くときもう「信仰なき老女」である彼女も、かつての信仰厚き日の記念であるつげの数珠を、永く保存していたという(Ⅱ, 248)。失われた信仰を語る彼女の筆致には、むしろいくらかの恨みがこもっていると感じられる。)

むろんマニユエルは、ジュリアン・グリーンではない。しかし、マニユ

エルのものである、最低にまで切り詰められた、しかし烈しい「無信仰者の信仰」は、かなりの部分グリーン自身に通じる。彼にもまた、「各種の教会のイエスではなく、人間」に心を奪われる部分はあった（32-6-4）。とくに賛意は示さないものの、ジイドが声をひそめながらいった「ぼくは神よりキリストに、はるかに近いと感じるんだ」という言葉を、興味ぶかげに引くところもある（37-7-19）。

この点、マニユエルとグリーンを結びつける太い絆は、エルネスト・ルナンへの関心である。ルナンの『イエスの生涯』はマニユエルの愛読書であり、一家の信仰の書ともされている（Ⅱ，236，Ⅱ，249）。32年から34年にかけて、グリーンもまた好んでルナンを読んだ。「科学的」なやり方で、イエスおよびキリスト教の原像に迫ろうとするルナンに多くの留保を覚えつつも、「キリストを見出すのに、つるはしをふるってあらゆる神学のあいだをかいくぐっていく」必要を認め、この点でのルナンの努力は買うのである（33-10-9）。ルナンの『マルクス・アレリウス』を読んで一度ならず心を打たれたことを告白し、この本が「若い信仰にみちていた歲月へのノスタルジー」を与えたともらすところもある（33-8-15）。それにもともと、「ブレイクがいったように、私たちの一人一人が自分のキリストを持つのではないだろうか」（32-6-14）。

しかしグリーンは結局、ルナンには説得されなかった。ルナンを語る筆致には、つねにためらいがついてまわる。「私たちがキリストに近づける代わりに、キリストの方を私たちに近づけようとしたこと」、「愛すべき哲学者にしようとして、キリストをすっかり縮めてしまったこと」（32-6-13）。これが、ルナンへの不満の中心なのであろう。また、ルナンがいくら教会を批判しようとも、この大きな人間の共同体がこんなにも永くつづいてきたこと、「それも〔教会〕のあらゆる矛盾や誤りにもかかわらずであること」を、彼は認めるのである（33-8-15）。

真の信仰をもとめて迷いを重ねていたグリーンに、ルナンを知ったこと

が宗教感情の、一種の洗い直しの意味を持ったことはいえる。だから、ルナンの与えた失望のあと、彼は聖書にもどり、聖書をヘブライ語で読もうとするのだというジャック・プチの意見は、たしかに的を射ている⁽²¹⁾。だとしても、一方でユンクや仏教にひかれ、もう一方でルナンに向かうグリーン精神世界は、たしかに多様な冒険の場である。仏教とユンク思想の持ついわば茫漠たる拡散の動きの対極には、ルナンの理性的な集中がある。それがどんなものであれ、霊的なものの発露には、彼の関心は動き出さずにいられないのであろう。

次章以下でみるように、1939年春、彼はカトリック教会に決定的に復帰する。だが、彼の霊性の更新はキリスト教を、あるいは宗教一般を広い視野でとらえる姿勢を少しも妨げないのだ。カトリシズムを基礎におきながらも、霊性の世界を大きな振幅で歩きまわる、こういってよければ霊的な「食欲さ」が、グリーンの魅力であるといえないだろうか。

キリスト教内部でいえば、グリーンにとって、ルナンの対極点に位置するのはレオン・ブロワであろう。『パンフレット』のころレオン・ブロワが及ぼした影響については、以前ふれたことがあった。不可視なもの、超絶的なものへの感覚に貫かれた彼の信仰は、いわば一種の毒であって、かえってグリーンを神から遠ざける結果になったのである。十数年を経て、今度は逆に「私たちに近づきやすくするために、〔キリスト〕を私たちの背丈に縮小する」(32-6-13) ルナンの試みの空しさを悟る。しかし、ルナンへの関心が結局は批判的なものであったとしても、グリーンにあるレオン・ブロワ的部分は、一度はルナンの目で見つめ直される必要はあったであろう。彼の神秘的、「狂信的」な基盤は、「科学」と対置されてもよかったであろう。

この時期からあとも、グリーンは博学な研究家としてのルナンに親しむことをやめていない。彼についての言及は『日記』のあちこちにあり、なかに一つ、こんな彼の言葉を引いているところがある。「信仰とは、それ

がもう存在しないときでも、なお働きつづけるという特殊な点を持つものだ」(64-6-6)。グリーンはこれを正しくないとしているけれども、奇妙にもこれは、多少グリーン自身にあてはまる言葉ではないだろうか⁽²²⁾。

ついでながら、グリーンが教会から離れていた時代の小説によくある、「聖堂」の場面について、少しふれておこう。無信仰な人物が、ひとりで聖堂へはいって安らぎを見出すという情景である。『レヴィアタン』ではアンジェールが(第1部9章)、『漂流物』ではエリアーヌが(第2部4章)、そして『ヴァルーナ』ではジャンヌが(第3部1908年3月)、それぞれ同じような振舞いをする。どの場面でも、彼らは社会と日常から暫時、隔離された歓びを覚え、ひそかな内面での解放感を味わうのだ。祈ることもせず、ただ内部を歩きまわるだけでよい。アンジェールは幼時の無邪気な信仰を思い出し、外の社会の方が好きだとするエリアーヌも、「この〔外部の〕世界に向かって、皮の詰め物をした小さな扉を閉めることができるのを」心地よいと感じる。「ここでなら、誰も私を傷つけに来ないだろう」と、くつろぐのはジャンヌである。「信仰のない女も、数分のあいだイエスの家に静かに身を隠してもいいだろう」。

「人間」イエスを求めることと並ぶ「無信仰者の信仰」が、ここにはある。そしてこの方は、ルナンのように学識を積み重ねるのとは違って、いわば身体自身による接触なのだ。それは概念を交えないだけ直截に、キリスト教的なものをいくらか吸収する機会となりうる。そしてもともときわめて感覚的な人間であるグリーンとしては、宗教感情においても直接感じとれるものが、なくてはかなわぬ重要性をおびる。「私は感じられるもの、見られ、嗅げるものを必要としていた。私の宗教はこのようであった」⁽²³⁾。それに、グリーンには「家」のテーマがある。閉じこめるものであり、情念の宿りであり、隔離の場である家は、聖堂という「避難所」において、最高の表現を見出すといえる。回心以前のグリーンもまた、よく聖堂へ赴

くことがあった。「私はキリスト教の聖堂に足を踏み入れるのにあたって、これまで何かしらときめきを、私に私の真の本性を告知らせる心のときめきを感じなかったことはない」というジャンヌの言葉に託して、グリーンは自分を語っているのであろう。

聖書を読むこと、イエス自身を求めること、聖堂に憩うこと。キリスト教信仰に今一步踏み切れなかったころのグリーンも、これらの点ではつながりを保っていたのである。

6

さまざまの迷い、ためらい、模索を経て、ジュリアン・グリーンがカトリック教会に決定的に復帰したのは、これまでも述べたように、1939年の春であった。彼の『日記』は39年3月15日を最後に、40年7月まで中断されるから、その間の事情はややつかみにくいものを残す。だが、のちの彼自身の言によって（41-2-28、および『人間に必要な愛』123-128など）ジェノヴァの聖女カタリナの『煉獄論』が重要なきっかけになったことは確実である。

むろん、信仰という一人の人間のもっとも奥深い問題について、明白な線を描くことができるものではない。34年11月のあの神秘的出来事から39年にかけて、いろいろの屈折はありながらも、心はある点信仰そのものといってよい状態にまで来ていたのである。シャルル・ムーレルは「不信仰の時期」は1924年から34年までとし、ついで34年から39年まで「仏教の誘惑」が来るのだという⁽²⁴⁾。ロベール・ド・サン・ジャンの方は38年にはもう教会への復帰が行なわれ、39年になってそれが決定的になるのだとする⁽²⁵⁾。

もっとも、35年からあと『日記』（第2巻『最後の美しき日々』にあたる）でみる限り、宗教的なことへの言及はむしろ少なくなる。内面の問題が大きいほどかえって、語りにくいと感じたのかもしれない。「性的な生

活よりはるかに私的なもの」(60-6-12)について語るための理由は、このころの彼がよく口にするところである⁽²⁶⁾。それでも、36年の2月から「12年ぶりに」ヘブライ語の学習を再開して、聖書をヘブライ語で読み始めたことがわかる。彼はこの「魔法のような書物」のゆたかさと深さにあらためて感じ入るのだ(37-7-27)。また、自分が眠る人間、あるいは小舟に乗って大海をただよう旅人のようだと反省を経て(35-9-19, 35-12-20, 37-6-24), 「すべての教会から遠ざかっている悲しみ」(37-11-5)が姿を現わす。「あいも変わらぬ快樂の飢え」(35-9-19)が述べられはしても、38年9月16日にはかなりはっきり「快樂の体験が終わったことが、感じすぎるほど感じられる」とある。そして、37年12月のある日、パリ郊外のサン・ドニ聖堂で Adeste fideles の歌声を聞き、彼は「もう一言も発することができないほどの感動」を得たのであった。のちに自分でも認める通り(51-11-24)、これは回心への重要な一歩となる。

「私は聖書を読んだ。よく考えてみて、一つの手が差し伸べれることを求めた」(37-3-11)といった『日記』の記事が目につくこの時期、一方では小説『悪人』の執筆が進んでいた。後年の作品にも例を見ないほど赤裸裸な「ジャンの告白」を含んだこの作品は、完全な形では、ずっとのちの1973年になってしか発表されないけれど、まさしく回心直前のグリーンの内心から作り出されている。もと修道士志望で、豊かな美意識にも恵まれた主人公ジャンをめぐるこの物語に、グリーン自身の要素がいくつも組みこまれているのは疑いを容れない。そしてやはり自伝的な小説『もう一つの眠り』が、同性愛の扱いにおいても、いくらか牧歌的な雰囲気をもっていたのに反して、こちらは徹底して暗い。倒錯者の悲劇を最後まで生きぬくジャンは、ついにはみずから命を絶つのである⁽²⁷⁾。

ジャンの自殺はグリーンの中での一時期の終りを意味するものかもしれない、作者グリーンはいま一つの曲り角にさしかかって、倒錯愛にまつわ

るすべてをことごとく明るみに出す誘惑にかられたのかもしれない。彼の「非宗教的」な時代は、自己への比較的ゆとりのある見方に立った『もう一つの眠り』で始まり、ただただ自己否定からなる『悪人』で終わるともいえる。告白と清算の意味を持つこの作品で、ジャンの救いは問題にされず、回心の希望はむしろエドウィージュに託された趣きがあるけれども、「ジャンの告白」が「神」の愛へのかなり明白なあこがれで終わることは注目されてよい。「人がとにかく宗教的回心と考えたがる、あの精神的破産の一つが問題だなどと想像しないでほしい」と断りながらも、彼は、いくらか『幻を追う人』のマニユエルのように、「あの人」がそばにいると感じられる喜びを語るのである。「あの人だけがぼくを愛してくれるがゆえに、ぼくを軽蔑しないのだと考えた。非難の言葉はただの一つも、あの人の中から出てこなかった。誰もいないぼくの部屋や、あるいはベンチで、あの人があるぼくの傍らに腰かけるためには、不幸なぼくの姿を見るだけでこと足りるらしかった」(Ⅲ, 335-336)。

もう一つ、彼を揺るがした大きな事件は、1938年9月20日か21日に起こった。このころはちょうど、フランス人民戦線政府の崩壊のあと、ミュンヘン会談によって、さし迫った危機を何とか回避する試みがなされていたときにあたる。当時オランダを旅行中であったグリーンはこの日、ロッテルダムのとあるホテルで、突如はげしい失意の発作に襲われる。机に開いた聖書の、一つの言葉も頭にはいらず、心は暗く閉ざされる。下で遊ぶ子供たちの声に、「戦争」を意味するらしい単語がまじる。彼はこのとき、「私は準備ができていないこと」、「私の混乱は、この試練をのりこえさせてくれるだろうと期待していた宗教感情より、もっと強いこと」を悟らされる(41-3-28)。彼のうちでは「一切の霊性」が崩れ落ちた。そのころの「程度の低い霊性」では、「大きな脅威をおびた試練には対抗」できないと思われ知らされる(45-12-14)。

38年当時には、記録されないこの事件は（むしろ記録されないことに、その重要さが察せられるが⁽²⁸⁾）、のちになって何回かふれられ、後年には「宗教が何の助けにもならず」、「祈ることが不可能であった」出来事とみなされている（62-4-24）。

この体験は、回心前夜にいたってもなお、自らの信仰に、むしろ宗教それ自身に疑いをはさむ瞬間が、グリーンにはあったことを示す。しかし、もともと絶望あつての宗教であり、疑いを知らぬ信仰の方が本物ではないのであろう。いかに、「そこには虚無ばかりがあった」（同日）にせよ、その虚無はやはり信仰によって埋めるしかないのであろう。こんなきびしい失意と虚無感のあとでも、グリーンは信仰に向かって進むことをやめないのだ。聖女カタリナの『煉獄論』が彼に、苦しみと神の愛の一致について教えたことは、のちにみる。この事件から約1か月半経った日の『日記』に、「私たちの神への概念の向う側に出なければならない。神は永遠に、すべての概念の彼方におられるのだ」（38-11-6）とあるのも、いくらかこの日のことを踏まえたものかもしれない、さらに12月20日の次の文も、引用に値いするであろう。「しかし、牢獄も囚人もないのだ。神の子としての自由があるばかりなのだ」。「自由」が彼のこれまでの関心事であったことは、あちこちでみた。彼の疑問はこの言葉で、一つの解答を得たことになるであろう。

ロッテルダムの出来事は、むしろ彼の信仰の強化に結びつくのではないだろうか。

7

さて、私たちはいよいよ1939年春の回心について、立ち入って考えてみることにしたい。『煉獄論』による啓示はどのようなであつただろうか。この「回心」によって、グリーンはどんな点に目を開かれたことになるのだろうか。

前述の通り、この事情を語る資料はそれほど多くない。比較的まとまっているのは、『日記』の41年4月28日、自作『ヴァルーナ』の成立事情にふれたくだりである。今後の検討の基礎になるテキストなので、少し長いけれど、次に訳出しよう。

「1939年の1月ごろ、ジェノヴァの聖女カタリナの『煉獄論』が私の手に落ち、私にとっても深い印象を与えた。私はこれまで偶然を信じたことはない。この本は私が心に感じていた多くの疑問に答えて、私のうちにしっかりと根づいていると思っていた意見をくつがえした。それは私の精神のなかで、人間の霊的運命に関する新しい考えの流れを決定づけたのである。その後少しして、アリストテレスとプラトンについてマリタンと交わした会話が、私がインドの神秘家たちの夢想によせていた信頼に、強烈な打撃を与えた。最初、私はこの対話に大いに苦しんだ。突然私には、救済を遂げるのに、これからさき数千年もあるのではなく、もうわずか数時間しかないのだ、と思えた。ショックはきびしかった。しかし同時に、一個の誤謬の建物全体がくずれ落ちるのを感じた。私の回心は、これらの事実、およびもっとひそかな性質の、ほかのいくつかの事実の結果として生じた。1939年4月、アメリカへ旅立つ数日前であった」。

マリタンを相手に「アリストテレスやプラトンについて」交わした会話の詳細⁽²⁹⁾、ましてや「もっとひそかな性質の」ほかの事実についてはよくわからないけれど、『人間に必要な愛』ではもう少し具体的ないきさが述べられている。彼はマリタンの妻ライサに、一人のポーランド人のドミニコ会の神父を紹介してもらい、サントノレ通りのある面会所で彼に会ったという。ゆるしが授けられたあと、「これからもきっと、罪に陥ることとはあるでしょう。でも、悲観的に考えないように。しかし、祈りなさい」とだけ、神父はいう。歓びが来たのはあとのことで、そのときはむしろ、別の人間になったというより、自分自身に、1916年の自分に戻ったように感じたのである⁽³⁰⁾。

ジェノヴァの聖女カタリナ。15世紀後半から16世紀はじめにかけて生きた、このイタリアの神秘思想家⁽³¹⁾が『煉獄論』で説くところは、もっぱら神の「愛」にもとづく「煉獄」の浄化的意味である。「靈魂は錆すなわち罪に覆われており、この罪が煉獄の火によって徐々に焼き尽くされる。この錆が焼き尽くされればされるほど、煉獄の彼らの真の太陽である神を徐々に完全に反射するようになる」(18)⁽³²⁾。「神は靈魂を神の本性にあずからせたまうから、靈魂は自分のうちに神以外の何ものも見ず、神は靈魂が創造されたときの状態、すなわち汚れなき純潔とするまで、このように靈魂を引きつけ、燃やしつづけたまうのである」(32-33)。

たしかに、罪を焼きつくす火は「ある意味で地獄の苦しみと似ている」(29)ほど大きい。しかし煉獄でのたましいは、火という形であらわれる神の愛に、深い歓びを味わう。「このように煉獄の靈魂は、最大の歓喜を味わうと同時に、極度の苦しみをも感じるが、苦しみは歓喜を、歓喜は苦しみをたがいに妨げない」(40)。したがって、「もし靈魂が、今の煉獄よりも一層速やかに障碍を取り除くことができる、さらに大なる煉獄を見出しえたとしたなら、直ちにそのなかに飛び込んだだろう。靈魂は、靈魂を神に適合させる愛によって駆り立てられているから……」(34)。

聖女カタリナの述べるところと、これまでのグリーンが問題にしてきたところとを付きあわせてわかることの一つは、「愛」の意味であろう。これまでグリーンは、『パンフレット』での主張も含めて、自分を「純粹」に、完全な状態に保つことに汲々としていたといえる。いつもたましいが快樂によって汚されることを恐れ、快樂か信仰かのあいだで往復運動を繰り返してきたのであった。しかし、もし自分を「完全」なままにしておけるとすれば、それはいわば自己の神格化であって、神の必要はないことになる。いいかえれば、「彼は自己の意志だけの力で純粹にとどまることが可能だと信じていた」⁽³³⁾のであり、神を信じるとはいいながらも、神に身を任せてはいなかったのである。

38年6月23日の『日記』に、「私は聖人であればよいと思っていた。それがすべてだ。私はこの言葉に何も付け加えることがない」とあるのは、問題の核心にうまく触れている。人間はついに聖人、すなわち完全に純粹であることはできない。もともと、純粹か不純か、神秘家か放蕩者かという問題の立て方が正しくなかったのである。自己に対する過信を捨て、罪あるものと認めるところから、神の「愛」への展望が開ける。『煉獄論』が教えたことはまず、このような意味での謙虚さであろう。そこには何より、罪人への深い愛が語られているのだから。

さらに、煉獄での神は、罪をほろぼし、たましいを神のもとで憩わせようとする明確な意図のもとに、「神に対する純愛を得ようとする意志」を持つたましい(15)と直接に向きあう。煉獄とは、限られた時間のなかでの、二つの「意志」の出会いの場である。「このように一切の罪から浄められ、彼らは意志において神と一致するから、神が彼らに与えたまう光の度に応じて神を明らかに観るのである」(24)。「愛の火」は個人個人の主体的な意志によって与えられるのであり、地獄へも煉獄へも、たましいは進んで赴くのだとされる(28-29)。

数年後、ジイドに向かって自分の宗教感情を打ち明けながら、17世紀のイギリスの詩人、ジョージ・ハーバートの詩《The Collar》に「〔彼〕の回心の、本質的なものがすべて」見出されると語るところがある(45-10-16)。やはり肉と信仰との激しい葛藤をうたったこの詩では、語り手が反抗に反抗を重ねたあと、最後に突然の回帰が来る。「だが、私がもっと荒々しく、怒りにみちて大声をあげると／私の言葉に一つ一つに／「わが子よ」と声が呼ばれるのを聞いた／そして私は、「はい、わが主よ」と答えた」⁽³⁴⁾。グリーンがつづいて述べるように、「おまえが私に語りかけ、私はおまえの声を聞いた」という関係が成り立つのが、キリスト教の独自の点なのである。神と人間とのあいだには、父と子の、直接の対話があるのだ。

さきにもふれたことであるが、茫漠たる時間のなかでの、非人称的な神

(仏)の慈悲という仏教的な思想に、グリーンはやはり従えなかったのである。「キリスト者とは何であろう。それは個人として実存する人間であり、自分自身を意識する人間である」と、モーリアックは『小説論』で書いた。ウイテルヴァールがその研究書で、「〔グリーン〕は、宗教の本質は神と個人の結びつきにあり、東洋が願うように、神と人類との結びつきにあるのではないことを、はっきりとさとした」⁽³⁵⁾と書くのも、このことを指すのであろう。上の引用文が示す通り、数千年もかかる救いより、数時間後かもしれない、恐ろしいけれど確実な、愛による救いの方に、彼はやはり心を奪われたのである。

しかし、煉獄がいかに神の愛にみちているとはいえ、たましいの喜びが苦しみと一体になっていることが、大きな問題である。ここにこそ煉獄の煉獄たるゆえんがあるであろう。「天堂において、永福を享けつつある諸聖人の靈魂の歡喜を除いては、煉獄の靈魂の歡喜に較べられるいかなる歡喜も他に見出せないと思う」(17)と、聖女カタリナは述べる反面、同じ章で「また一方、彼らの苦しみは非常なもので、もはやそれをいかなる言葉でも言い表わせず、神がそれを特別な寵愛によってそれを識らせたもうたのでなければ、いかなる知性をもってしても、その苦しみの概念の片鱗すらもまとめることはできない」(18)とも語る。

人間がただゆるされるだけでなく、やはり「火」が伴うのだというきびしさが、仏教にはないもう一つの特徴であろう。そしてその恐ろしい火はまた、喜びの火である。苦しみと喜びの統合というところに、いかにも東洋とは違った、いわば弁証法的な思考をみる思いがする。

グリーンに即していえば、いくら彼が倨傲な姿勢を捨て、神の愛にめざめたとしても、それはけっして神への手放しの依存ではない。苦しみを同時に引き受ける決意を固めたうえでの、信頼なのである。39年の回心をきっかけに、たしかに彼は神秘家か放蕩者かの対立を離れて、人間的現実の承認に向かいはする。しかし、信仰の基盤を堅持したうえでの現実の受容

ということ、これもまた別種のたたかいなしにはすまないのだ。この点はおちにも検討するけれども、グリーンが体得したのは、このようなきびしさに裏打ちされた愛だということは、ここで確かめておきたい。「このイタリア女性は真っ赤な火を通して、私に天を指し示してくれた。火はおそろしかった。しかし天は確実であった」と、グリーンは書く⁽³⁶⁾。

『煉獄論』によって仏教的なものがくつがえされたと同様、一時グリーンをひきつけた「人間」イエスの考えも排除されたことは、いうまでもない。「煉獄」とはカトリシズム固有の思想であって、人間イエスのかかわる余地はない。

もともと、煉獄の使命をなす「ゆるし」については、中世末期のあの免罪符の問題でもわかるように、種々議論のあるところである。煉獄という観念自身も検討を要するのかもしれない、最近のカトリック教会ではこれにあまり重きを置かない傾向があると思える。煉獄に相当する過程がむしろ地上にあるのだという考えには、たしかに十分な理由があるであろう。しかし、プロテスタント諸派が認めないこの靈魂の宿りについて、グリーンは、後年まで心をひかれていくように思われる。「たぶん死ぬことなしに神を見つめるためには、煉獄の炎を通過していなければならないのであろう」(55-4-4)といったように、煉獄についての言及は『日記』のあちこちにあり、最近刊の第12巻『世界の光』にもなお、この聖女カタリナの著作のことが語られている(79-7-9)。教皇ピウス十二世が謙虚にも煉獄にはいらせてもらえるように祈ったことも、彼が好んで引く(70-3-1, 73-9-13)ところである。

罪と救済の物語でもある後年の小説『人みな夜にあって』(1960年刊)のなかでも、二か所ほど煉獄が問題にされる(Ⅲ, 435, 594-595)。自分の救済を危惧する主人公ウィルフレッドは、天国と地獄しか信じないプロテスタントと違って、「カトリックなら、煉獄というものがあって、何もかもが最後にはうまくおさまることを知っている」と思い直し、心を落ち着ける

のだ(Ⅲ, 435)。放蕩者でもあるこの青年のように、「おれは若いんだ。何をしてもどうにかなるさ」という安易な姿勢に結びつく危険はあるにしても、天国か地獄かの両極端でなく、煉獄という一つの間接地帯が設けられたところに、神の慈愛をみる立場もありうるであろう。(なお、これは小さなことだけれど、『幻を追う人』でマリー・テレーズの母が、家にある信仰の書《Pensez-y bien》をみなに読ませるとき、煉獄についての部分を選んでいる(Ⅱ, 278)。煉獄への関心の素地は、もともとグリーンに内在していたのかもしれない。)

8

ともあれ、聖女カタリナによって、グリーンはこれまでになかった広い地平に導かれる。思いかえせば、1924年、彼の非宗教化の始まりをしるした、あの『フランスのカトリック信者へのパンフレット』は、もっぱら地獄の意味を論じ、煉獄について語るところはきわめて少ない。そのころの彼には、人間本来の高貴さとその罪過の大きさを意識するあまり、たましいを浄めるのに煉獄では十分ではないと思えていたのであった。「十字架の上での死も、地獄を廃しはしなかった」(断章113)⁽³⁷⁾。神の目からみて、人間が偉大かつ貴重であるからこそ、煉獄では足らず(104)、「罪過が償いえないと判断されるということはつまり、その罪過を犯した、たましいに対して、無限の価値が付与されているしるしにほかならないのだ」(103)。むしろ神の慈愛こそが、地獄の存在を可能としたのである(105)。

地獄から煉獄へ、打ち捨てる神からゆるす神へ。『パンフレット』の時代からグリーンが歩んだ道の遠さがわかる。『パンフレット』にみなぎるのは、ただ「天国と地獄のあいだの選択」(115)を問題にし、神を無限の高みに押し上げるきびしさなのだ。そこでは純粹・高貴の理想が強調されるあまり、現実の生活での人間の弱さはただ弾劾の対象でしかない。

神の働きを主として裁きと断罪としてとらえた当時の彼には、明らかに

ジャンセニスムのかげが認められる。ジャンセニスムとグリーンのかかわりは、なかなかデリケートであって、つねに反発と抑えがたい誘引を繰り返しているように感じられるが、基本的にポール・ロワイヤルの厳格主義に親近感を捨てきれずにいるというのが、実際の姿であろう⁽³⁸⁾。「ジャンセニスが私の生活にはいつて来てから、ついに完全に出ていったことはない」と、『青春』にある（V，1272）。とくに1924年に先立つころ、これがレオン・ブロワと並んで『パンフレット』の思想的土壌を培っていたことは確かである。「今ではジャンセニスムふうの厳格主義が、私にどんなに遠く感じられるにせよ、16歳から20歳にかけての時期、パスカルが私にとって宗教そのものであり、パスカルを読むのにときどきひざまずきさえしたことを、私は忘れることができない」（49-5-25）。

これに反して、39年の1月から2月にかけて、『日記』に瀕出する宗教論は、反ジャンセニスム的色彩をその特徴とする。『煉獄論』を読んだとおぼしい1月には、「つらい宗教上の危機」を通過したとし、「私はおそろしいほど揺り動かされた」（39-1-29）とあるだけで、この本についての直接の言及はない。けれども、あるいはつみびとを排撃するボシュエの「靈的狂暴さ」に不快の念を示し（39-2-3）、あるいは誰もが無理にでも招き集められる宴会の寓話（ルカによる福音書，14-24）に心を打たれるなど（2-8）、『煉獄論』によって自覚される「愛」の契機が明確に表明されるのをみることができる。そして、2月10日にはパスカルの『プロヴァンシアル』のいくつかの書簡にふれて、「ポール・ロワイヤルの若きチャンピオンの手きびしさ」、「熱狂的にして、かつ氷のように冷たいその陽気さ」に、悲しみと口にしにくい嫌悪の念をもらす。『パンフレット』と違って、罪ある者を容赦なく排除する神は、もうここにはいない。「人はその意志に反してでも救われる」と、彼はいいきるのである（2-8）。

最後に、『煉獄論』と並んで、39年の回心にあたってジャック・マリタン

の果たした役割についても、すこしふれておこう。グリーンという「アリストテレスやプラトンについてマリタンと交わした会話」は、それが輪廻にかかわっていたこと以外、詳しくはわからないけれど、彼にあてた41年5月11日付の書簡には、マリタンの方ではもう覚えていないであろうような言葉が、「〔彼〕に決定的な働き」をしたと書かれている⁽³⁹⁾。

ムーレルによれば、マリタンが教えたのは、「限られた時間と空間のなかで、自己の永遠の運命を決定すべく生を享けた人間の、自由にしてかつ自らに責任を負うべき姿」だという⁽⁴⁰⁾。輪廻思想では、長い人間の連鎖のなかで個人の責任が著しく縮小されるのであるから、ムーレルのいうところはおそらく正しいであろう。『煉獄論』にも、神に前での個人の自覚という契機は含まれていた。回心当時のグリーンが「ゆるす」神を知ったとしても、それは個人の責任ということと矛盾するものではない。むしろ、「人がその意志に反してでも救われる」からこそ、その言動の重みが一層高まるというべきであろう。

回心の約2年後、「一つの面から別の面へ移った、あるいはむしろ、一つの扉をくぐった」この体験をかえりみながら、彼は自分がどう変わったのかを自問する。「私は依然同じ動作をしている。しかし、この動作をしているのは、もはや同じ人間ではないのだ。私に責任は、これまで以上に大きい」(41-6-27)。

回心のあとアメリカに渡ったグリーンは、どこか一時観想生活を過ごせる修道院を、この地で知らないかとマリタンあてに問い合わせている⁽⁴¹⁾。この生活が実現した様子はないが、全ヨーロッパ的規模の戦争がとうとう勃発し、自分の心にも大きな変化が生じた今、積年の夢をしばらくでも実行に移して、世界と人間について思いをひそめたかったのであろう。

さて、私たちはここで目を転じて、後年の戯曲『敵』（1954年初演）を調べることにしよう。1939年春の回心の内的な射程が、より深くさぐれるであろう。この作品がグリーン内面のドラマを映し出していることについては、執筆中から自ら認める通りであり（53-8-24）、のちにはもっとはっきり、「〔彼〕の秘密がすべてここにこめられている」（75-8-28）こと、それも「ポーの盗まれた手紙のように」明白に、「〔彼〕の回心の鍵がここに見出される」こと（70-10-5）を語るのである。

グリーンの劇作としては『南部』に次ぐ第二作にあたる『敵』は、現世の誘惑についに打ち勝つことのできなかった、もと修道士ピエールをめぐる展開される。今しも修道院から出てきた、無神論者ではあるが、何かしら超自然な雰囲気をもたせられるこの男に、その異母兄弟の妻エリザベートがたちまち引きつけられる。やはり信仰を持たない彼女は、自分と一脈通じる何かを感じずにはいられないのだ。この世の非現実さを説き、美しい顔、魅力的な肉体に心を奪われながらも、生きることの基本的な倦怠を説く、この男の不可解な魅力に、彼女はついに屈する。しかし、嫉妬深い夫の目を忍ぶ、この明らかに「悪」である激しい情熱が進むに連れて、奇妙にも一種の浄化の力が働く。ピエールは、内心に渦巻く世界への憎しみがほぐれていくのを感じ、エリザベートの方は、彼女が「敵」と呼ぶ強大な力につきまとわれるのを感じる。たしかに「悪」に発するこの敵はしかし、燃える火を使って彼女を包み、快楽を焼いて「愛」に高める限りにおいて、もしかして神に属するものかもしれないのだ。最後には、ピエールは、彼女の夫が遣わした刺客の手に倒れ、そのエリザベートもまた、ショックのあまり、錯乱の状態に陥る。「火をほかにしては、何物も存在しない。〔……〕悪魔たちでさえも、信仰を持っているのだ……」などと口走りながら。

グリーンはこの劇を、どんな訂正も加えず、憑かれたように一気に書き

上げたという（56-6-11, 75-8-28など）。一人の人間の内面がそのまま神と悪魔の、拮抗する力の相争う舞台と化するような、神秘そのもののテーマが、ここでは濃密な現実性を伴って表出される。その劇的な迫力において、内容の深さにおいて、これはグリーンの傑作の一つに数えることができ、「私の全作品の頂点だ」という彼自身の言葉（75-8-28）を裏切らないであろう。

悪にひかれる抵抗しがたい力のなかに、いつしか神への動きが混じりこんでしまうということ。「火」の激しさにおいて、二つの力は区別ができないということ。——戯曲『敵』のテーマは、ほぼこの点にまとめられるであろう。ピエールが簡潔にいうように、「不幸なことに、神に触れることなくして、悪魔に触れることはできないだろう」（Ⅲ, 1122）。エリザベートは、ピエールという悪魔と協約を結んだ男（Ⅲ, 1139）を愛することで、かえって神に導かれる。「〔神を信じるためには〕ピエールがここシランジュにやってきて、それと知らずに私を神様の方に導いてくれることが必要だったの。ピエールが私を待っているところでは、神様もまた私を待っていてくださったの」（Ⅲ, 1144）。問題は「火」の高みに達することであり、罪の火は、浄化の火、神の愛の火と結びあうことができるのだ。「悪の偉大さを理解するためには、偉大さそのものの感覚を持たねばならない」（Ⅲ, 1101）のである。

悪への誘惑と神への志向は、その力の大きさにおいて相即するというこのテーマは、『敵』に先立つ『モイラ』（1950年刊）にもみられる（この小説のエピグラフとして、はじめ「もっとも偉大なたましいは、もっとも大きな悪徳をもなしうるものだ」というデカルトの言葉が予定されていたという）。「火がぼくの祖国だ」と考える（Ⅲ, 160）ジョゼフは、エリザベートのいう「火の被造物」（Ⅲ, 1149）に属するであろう。確かに、ムーレルが繰り返し注意を促すように⁽⁴²⁾、聖人ほど誘惑にさらされないとするのは謬見であって、「聖性の危険は転落の危険を高め」、「人は高く登れば登る

ほど、足元に深淵が刻まれるのを見る」のであろう。

劇作『敵』は39年の回心の事情をあからさまに語ったものだ、とグリーンは何回もいう⁽⁴³⁾。悪におびやかされる激しさは、そのまま神への道を開くものだとするれば、これは、肉への誘惑にあれほど苦しんだグリーンにとって、大きな救済の原理となりうる。問題は「火」にふさわしい強さを持ちつづけることにあるのだ。このような自覚が、「火」による浄化という『煉獄論』の思想と、うまく合致することはいうまでもない。聖女カタリナの考えの中心はまさしく、「火」は神の愛の現われだとするところにあったのである。それに、今にして思うと、グリーンが悪と救いの相即について語るのは、これが初めてではない。回心に先立つ5年前、モーリアックとの会話を記録しながら、彼はモーリアックがいった次の言葉を引いているのだ。「でも、悪魔のいるところ、キリストもおられるのだよ」。そして彼は、つづいて書く。「私はこの話し合いについて、深く考えこんだ。私の心の奥には、まだ信仰がある」(34-3-2)。彼の自覚にはあらかじめ布石が置かれていたのであり、その回心はいくらかはモーリアックの言葉の再確認の意味を持つであろう。まことに、エリザベートが錯乱のなかで述べ(Ⅲ, 1158)、グリーンが好んで口にする⁽⁴⁴⁾言葉の通り、「偶然は存在しない」のである。

ところで、神と悪魔が「火」としての共通性を持ちうるとしても、ここで「愛」の契機が重要な役割を果たすことを、十分認めておく必要がある。聖女カタリナにおいても、苦しみが歓びでありうるのは、神の愛あればこそであり、『敵』でいえば、罪の火は一人の女性のひたすらな愛に基づいているがゆえに、浄化の火となりうるのである。中世の昔、カタリ派異端を排斥したことで有名なあの聖ベルナールは、「もっとも陋劣なものからきわめて崇高なものまで、すべての愛は本質において「一つ」である」とまで断言した⁽⁴⁵⁾。「神様は私たちに、神様を愛するにも人間を愛するにも、一つの心しかお与えにならなかったのです」と、『敵』

の乳母も語る（Ⅲ，1144）⁽⁴⁶⁾。「愛は神の本質をおびる。被造物たる人間から同じ人間への愛ですらそうだ」（50-3-3）。ピエールはエリザベートへの愛によって「〔彼〕の心にあった悪しきもののすべて」が「奇跡的に浄化された」（Ⅲ，1114）との感慨を抱き、エリザベートもまた、「快樂なんかもう問題じゃないの。愛は快樂を無に帰してしまうの。ちょうど燃える火が枯れ葉をそうするように」（Ⅲ，1144）といい切るのである。

考えてみれば、いかに肉にもとづく人間レベルの愛であっても、宗教感情との何らかのつながりは成り立ちうるのだ。愛もまたある「絶対」の追求であり、無限への願いであり、想像力に支えられた非現実なものへの情熱である。賭け・献身・忘我・熱中など、両者に共通な契機をいくつもあげることができる。信仰も愛も、一つの「距離」を踏まえたエネルギーの問題でありうるのだ。実際、「人間の生においては、一切が奇妙に混ざりあう。高揚は容易に一つの面から他の面へ移り、情熱にみちた飛躍は人を現世にも神にも向かわせる」⁽⁴⁷⁾のである。

これまでの論述のなかで、私たちはグリーンズの宗教感情の特質について何度かふれる機会があった。何より彼には根強い狂信者的な基盤があり、信仰は目で見、耳で聞こえる感覚的表象と、ともすれば結びつきやすかった。彼にとって信仰とは観念に属する以前に、まず激しさと感覚の問題であった。一方で、彼の肉感性の強さは今まで何回も確かめてきたところであり、信仰も肉感性も極度に高まりうるのが、彼に課せられたいわば宿命なのであった。しかし、これまでもっぱら対立として考えられていた両者のかかわりは、共通性にもとづく力の交換でもありうる。ある点、信仰と肉感性とは相互のぶつかりあい、高めあいのなかで、分かちがたく入り混じることもしこる。肉感性はその激しさのなかで信仰から力を借り受け、信仰を養うエネルギーに転化することもありうるのだ。

肉にもとづくすべての愛に、神に向かう契機は含まれていること。その激しさは「火」となって、浄化の働きをつとめうること。——グリーンを

回心に踏み切らせた重要なきっかけは、おそらくこの点に認められるであろう。すべての愛が基本的に一つだとすれば、どうして同性愛が例外であるだろうか。むしろ、今日の社会で市民権を持たないこの屈折した愛にこそ、「火」があるのではないか。「この世で私たちの行なうもっとも真面目なのは愛することであり、ほかはほとんど問題ではない」⁽⁴⁸⁾という言葉にこそ、彼の終生の結論があるのだといえよう。

グリーン作品の流れからいって、『敵』が明確に示すような、悪にも救いの可能性が宿るのだという発見は、今後に大きな影響を及ぼす。すでに『モイラ』にも潜在的にあったこのテーマは、『敵』にいたって大規模な展開をみせ、『人みな夜にあって』、『他者』(1971年刊)と受け継がれる。あとの2作品は霊的成長の物語であることにおいて共通し、前者ではさして自覚的な信仰を持たない平凡な青年が、後者ではむしろ世間から爪はじきされる女性が、屈折を経ながら、思いがけない高みにまで行き着く。『人みな夜にあって』のウィルフレッドは、『モイラ』のジョゼフとは逆に、他人への愛のなかで命を落とし、『他者』のカーリンは反発し身をもがきながらも、神の手にとらえられていくのだ。これまでの作品が作中人物の「救い」を直接には問題にしなかったのに較べて、ドラマの性質がひときわ変化をとげたことがわかる。

教化的な小説は書くまいと繰り返し決意し(48-4-12, 69-6-13など), 「小説は罪で作られるのだ。テーブルが木で出来ているように」(55-10-27)という信念を持つグリーンがあえて救いを小説のテーマにするのも、やはり「悪魔の後ろに神がいる」(55-8-11)ことを悟ったからにほかならない。罪を描くことがそのまま、救いの問題となるのだ。「罪人こそ神のすぐそばにいる」(60-11-5), 「私たち一人一人のなかに、罪人と聖人がいるのだ。[……]それも同時に二人が」(51-6-26)といった発言が、今後の『日記』の一つのテーマとなる。

ウィルフレッドを中心にする、比較的一貫した構成の『人みな夜にあって』

て』に較べて、『他者』の方は、構成からいっても、テーマの広がりからいっても、意味するところがはなはだ多い⁽⁴⁹⁾。ここでは愛から殺人にいたる、他者との関係のさまざまな型が示されていること。「他者」という語が多義的であって、大文字での他者すなわち神のほか、これは自分のなかでの知られざる存在をも指示するであろうこと。これがひとつの変身譚の趣きを持ち、ロジェやカーリンのほか、数多くの人物が物語のなかで予期しない反面を見せること。……

『他者』について詳しく論じるのは当面の課題ではないが、まさしく回心の物語であるこの小説において、「わな」という語が一つのキーワードになることは、どうしてもふれておく必要がある。それ以前にも何回か用いられた(Ⅲ, 738, 751など)この語は、最後にカーリンが自分の入信にふれて、「要するに、わたし、わなにはまってしまったんですわ」と語る(Ⅲ, 986)に及んで、決定的な意味をおびる。快樂に引きずられやすく、他人を脅迫したりもする、もともと善人とはいいがたい彼女が、むしろ自らの意に反して神を信じるところまで来た過程をふりかえれば、その意外さに、神のわな、あるいは奸計を感じたくなるのも無理はない。それに、すべてはロジェへのきわめて人間的な愛を出発点とする。ロジェという、途中で修道生活を断念する、むしろ凡庸な男によって、彼女は神に導かれたことになるのである。

「わな」にはまったという気持は、グリーン自身がその回心にあたって感じるところでもある⁽⁵⁰⁾。実際、人が神にいたる過程はとても予想の限りではないのであろう。「神のうちにしか、神からの避難所はない」(40-8-3)。「自分の方で、神の存在を忘れるようにつとめたけれど、神が私の存在を忘れるようにすることはできなかった」⁽⁵¹⁾と彼は語る。

堂において一瞬のうちに劇的な回心をとげた。唯物論的思想に親しむことから始めたジャック・マリタンは、レオン・ブロワの導きを受けて、ベルクソン哲学からカトリシズムに転じた⁽⁵²⁾。世にいう「回心」からみて、ジュリアン・グリーン⁽⁵³⁾の1939年春の転回は、かなり違った趣きを持つ。

彼の場合、キリスト教的枠組みは幼少のころからあり、1916年には一度はっきりカトリシズムに目覚めているのだ。「非宗教的」な時代においても、何らかの形で信仰心があったことはこれまでみてきた通りである。教会からの離脱はむしろある点、信仰への傾斜が強いがために生じたのであった。彼が「神が存在しないかもしれないという考えは、一度も私の心をかすめさえしたことがない」(39-2-8)と語るのは、文字通りに受けとるべきであろう。この回心からほぼ12年が過ぎた1951年11月24日、彼はモーリアックがジイドとの対談で「ジュリアン・グリーンは事情をよくわきまえたうえで、キリストを捨てたのだ」と発言したのを知って、憤然として反論する。「非宗教的」な時代の『日記』をあちこち引用しながら、彼は声を荒げて詰問するのだ。「いってくれたまえ。フランソワ・モーリアックよ。これがキリストを捨てた男の言葉だろうか」。たしかに彼の「回心」は、信仰の理解の仕方、神のとらえ方の修正にほかならないといえよう。「私はこれまで、一日でも神について考えずに生きてきただろうか」(54-8-22)。

一方ではまた、この回心からあと、グリーンが安らかな信仰に身を落着けたのではいささかもない。このとき以来カトリック信仰に一点の疑いもなく(55-6-1)、教会との完全な一体感のなかで生きているとしながらも(54-11-29)、自分を本当のキリスト教徒と呼ぶことへのためらいを洩らす(55-3-18)。40年代以後も、何回かきびしい宗教的危機を経験したことは『日記』の示唆する通りである⁽⁵³⁾。そして、グリーン終生の課題である肉の苦しみにについても、依然痛切な言及が相次いでみられる。教会がこの点について何も解決を示さないと嘆き(44-4-19)、性的現実がいかに困難な問題であるかを訴える(57-1-23)言葉がじつにひんぱんに出てくる⁽⁵⁴⁾の

を読むと、まるでグリーンが何ら「回心」を通過しなかったかのような印象さえ受ける。教会からの離反のきっかけとなった、快楽の生活と宗教的实践とを両立させることへの偽瞞の意識は、依然として彼を悩ませ（44-4-21）、老境にいたってさえ、「私は本能という巨大な力の犠牲者だ。私はこれに対して大したことはできないのだ」（72-7-12）といった嘆きが口をついて出るのだ。まったく、グリーンには「年齢による平穩さ」など無縁（72-3-10）なのであろう。

ジャック・プチは、教会からの離脱は「表面上明白であっても、彼が自分で思っていたほど深くはなかった。行なわれるとすぐ、早くも復帰が開始されるのだ」という⁽⁵⁵⁾。グリーン自身も、後年になるほどこの期間を強調しなくなるように感じられる。つねに不安定なまま、肉の問題との対峙をつねに解かないままなのが、グリーンの宗教感情の本質だとして、その「回心」を重要視しない立場もありうるかもしれない。

けれども、もともと「回心」によって平穩が得られると想定すること自身が正しくないのであろう。聖女カタリナの啓示は、たしかに神の愛の自覚を通じて、人間的現実の受容を促したところにあった。「私の最大の罪は人間の条件を受け入れようとしなかったところにあるだろう」（49-1-16）という反省は、まさしく大きな意味を持つ。聖人であろうとする過大な夢に代わって、このような謙虚さを彼は自分のものにしたのであった。「この世は悪魔のものだ」（断章156）、「この世を嫌悪するカトリシズムはすべて正しい」（181）といった『パンフレット』の主張から、まったく遠いところへ来たことになる。しかし、『煉獄論』が教えたのはまた、神の愛が「火」とともにあるということであった。神の愛は、苦しみのただなかで味わわれるのであった。真の信仰が成り立つのは、だから、いたずらに苦しみなしの愛にあこがれることではなく、また歓びと苦しみのあいだに何かの中間的な妥協点を求めることでもなく、二つの極のなかでつねにたたかいつづけることによってであろう。

回心の翌年、再開された『日記』のごくはじめの方で、彼は「靈的な解放の希望とは人間の頭脳を苦しめうるもっとも惨めな幻想だ、と心に思う日がある」(40-7-24)と率直な感想を記す。靈的水準が高いほど誘惑が強まるのだというムーレルの考えはさきにもみた。この見方の延長上で、アントニオ・モールは、回心後かえってグリーンは肉の問題にとりつかれるのだと指摘する⁽⁵⁶⁾。この点はグリーン自身もうべなうところであって、肉の妄執が「ほとんど変わることなく、靈的な高まりのあとで、いつもより長い祈りのあとで、そして震えながらいうのだが、聖体拝領のあとで」(72-7-12)生じることを、思い切った大胆さで認めている。

『モイラ』のジョセフ、『敵』のエリザベートと同じ「火」の民であるグリーンとしては、「本当のキリスト教は苦悩のうちにある。安楽のあるところ、宗教は遠い」(72-5-8)と思い定めて、「死ぬまで悪魔に責めさいなまれることを覚悟」(55-5-22)するしかないのであろう。キリストは剣をもたられたのであり(55-5-29, 61-9-30)、ガブリエル・マルセルもいったように(70-5-17)、「信仰はたたかい」なのである。

たしかに、回心前に較べて、一見事態は同じであるかのような印象を受ける。しかし、ジュリアン・グリーンが明らかに一つの巨大な「愛」の訪れを受け、これを心から信じたこと、悪と苦しみのうちにある救済の契機を、実感ともに理解しおおせたこと。これはやはり、動かしがたい事実である。40年代以後も、グリーンの屈折した歩みはつづく。もう大幅な逸脱はみられないにせよ、第2回ヴァチカン公会議が始まってからは、カトリック教会の「近代化」路線に同意しきれないものを残しているし、最近では東方正教会やイスラムに心ひかれる気持を打ち明けている。それにもともと、肉欲と信仰が激しくぶつかり、たがいの力を交換しあうといった内的世界は、彼に一貫した神秘家的傾向、超自然への抜きがたい誘引とともに、むしろ中世の修道士にこそふさわしく、今日のカトリック教会の枠内に必ずしも納まりきれないのかもしれない。しかし、むしろそうであれば

こそ、彼を救いうる唯一の原理としてのカトリシズムに、ますます強く執着するのであろう。生涯を通じてのさまざまなためらいのあとで、たとえば『人間に必要な愛』の末尾で、カトリシズムのあらゆる基本的な信仰箇条に、まったく同意を誓うグリーンが、やはり彼の究極の姿なのであろう。

グリーンの歩みをみるにつけ、私たちは彼の好きな「らせん」のイメージをことのほか興味深く思う。20回も同じところを回っているような気がする。しかし1メートル半は登っているのだ。同じ過ちに落ち込んだと思えるときでも、気づかずに前進はしているのだ。上に登るにつれ、登りはますます険しくなる。しかし、「頂上は光のなかに溶けこんでいる」(36-4-9)のである。

「らせんの坂を登るのはつらい。しかしそれは、死と光明に向かっている。もっとも暗い瞬間においても、自分に打ち勝つすべての希望がまったく無意味に思えるときでも、上の方に、ごく遠いところに、永遠の光が輝いているのを思い出さねばならない。私たちが何をなそうと、ときには私たちの意図に反してまでも、一つの幸せに向かって私たちは進んでいるのだ。そしてその幸せについては、人間の精神ではどんな考えを抱くこともできないのだ」(37-12-8)

光と上昇を信じるこの言葉が、ジュリアン・グリーンの「回心」以前に書かれたことに、私たちは最後に注意を向けておきたいと思う。このような感じ方こそが、『煉獄論』を受け入れる基盤となったのであり、兩次大戦間を通じて、彼はやはりらせん状に上昇することをやめていなかったのである。

〔注〕

- (1) 『日記』を含め、グリーンの作品から引用は、プレヤード版全集に収録のものはすべて、この版による。『日記』については日付を、そのほかは巻数とページを示す。
- (2) 「神秘家にして放蕩者」(《Etudes françaises》20号)、および「『もう一つの

- 眠り』から『幻を追う人』へ」(同誌21号)。
- (3) *Les Jeunes années*, II, 496.
 - (4) 32-11-25, 12-2, 12-24, 33-1-16, 2-21, 2-23, 3-16, 3-30など。
 - (5) Charles Mceller: *Littérature du XXe siècle et christianisme*, I. *Silence de Dieu*, p. 345.
 - (6) 両次大戦間の、作家たちの政治行動については、H. R. ロットマン『セーヌ左岸』(天野恒雄訳、みすず書房)を参照。カトリック作家だからといって、立場は一樣でなかったことがわかる(たとえば、98-99ページ)。
 - (7) この病気についての恐怖自身が一つの病気であることについては、56-9-23。
 - (8) *Mille chemins ouverts*, V, 925.
 - (9) 後述する1939年春の回心に先立つ1月ごろ(39-1-29), 54年の夏(54-8-7), 詳しくはわからないが、51年(54-7-2)など。もっとも大規模なのはおそらく、47年から48年にかけて(48-6-30, および編者ジャック・プチの注IV, p. 1019 n.2 を参照)。
 - (10) なお、55-5-11, 65-10-19, 70-2-16を参照。この論文の冒頭に引いた二つの記述では33年とあり、55-5-11では、二日にわたったこの事件が同じ日に起こったように読める。
 - (11) グリーンが体験したさまざまな種類の超自然的な出来事のうち、宗教的な性格の「呼びかけ」については、のちに彼自身が回想するところ(70-5-22)。なかでも48年4月30日の体験はとくに重要(48-4-30, 70-2-2)。「[[彼]の生涯でもっとも不思議な時間」であったこのときの詳細は、「[[彼]が亡くなって]からでしか『日記』で読めないらしいが、前年からの宗教的危機の帰結であったことは確かで、『モイラ』でのジョゼフの言葉「ぼくは一度[……]神の現存という赤熱する火に投げこまれたことがあるんだ」に痕跡をとどめているらしい。
 - (12) 「福音書を毎日読むのを、私は一度もやめたことがない」(51-11-24)。
 - (13) ほかに、35-4-17, 4-21など。
 - (14) 最近刊の日記『世界の光』においてもなお、この世の現実性についての疑いを語る長い記述がある(79-3-28)。「子供のときから私はつねに、私たちの目に映るような世界の現実性に、疑いを抱いてきた。それは存在する。しかし、私たちが見るのとは違った仕方においてなのだ。[……]私は見えないものの現実性をあまりにも信じこんでいるから、見えるものによって完全に騙されることはない」。
 - (15) ジャック・プチの注(IV, 100 n.1 およびIV, 997 n.2)を参照。
 - (16) 32-8-12, 34-2-13など。
 - (17) Julien Green et Jacques Maritain: *Une Grande amitié: Correspondance (1926-1972)*, p. 81.

- (18) Julien Green et Jacques Maritain: *op. cit.*, p. 84. および Ch. Moeller: *op. cit.*, p. 364.
- (19) 1941年10月4日付の手紙（前掲書 p. 84）。
- (20) Ch. Moeller: *op. cit.*, p. 364. ムーレルのこの著書の一章，《Julien Green, témoin de l'invisible》では、『モイラ』までの時期が扱われている。
- (21) Jacques Petit: *Julien Green* (Collection 《Les Écrivains devant Dieu》), p. 49.
- (22) 一つの回心の物語であるのちの小説『他者』において、ロジェは女主人公カーリンに向かっていう。「信仰を失ったと思いこんでいても、心の底でそれを守りつづけている場合があるのですよ」（Ⅲ，862）。
- (23) *Mille chemins ouverts*, V. 966.
- (24) Charles Moeller: *op. cit.*, pp. 352-356.
- (25) Robert de Saint-Jean: *Julien Green par lui-même*, p. 131.
- (26) 36-6-3, 37-6-24, 37-7-10。「靈的次元の打明け話に身を委ねるぐらいなら、コンコルド広場で服をぬいで、みみずみたいに裸になるだろう」（75-5-29）。
- (27) この小説については、井上三朗「『悪人』の中の人物たち」（1）～（3）（山口大学「文学会誌」36号，「独仏文学」7，8号）を参照。
- (28) 38-10-2に「きっと私の生涯でもっとも苦しかった数時間」とあるのは、たぶんこの日のことを指すのだろう。
- (29) これがやはり輪廻にかかわっていたことは、1941年5月11日付のマリタンあての手紙でわかる。
- (30) *Ce qu'il faut d'amour à l'homme*, pp. 125-128. また、マリタンにあてた1939年4月25日の手紙も参照。
- (31) ユイスマンスの小説 *Sainte Lydwine de Schiedam*（邦訳題名『腐爛の華』）に、ちょうどこの聖女について簡単な紹介があるので引用する。「ジェノヴァの聖女カタリナ。イタリア人。結婚して、はじめは華美な生活をしていた。それから、イエスから聖痕を加えられたので、聖パウロ場合のように、電撃的に改宗が行なわれた。彼女は超地上的な病気の好例で、その言葉によると「頭から足まで引き裂かれた」。生きているあいだ、人々の魂を救うために、煉獄の火に耐え、この業苦の場について、じつに説得力のある高邁な論文を残した。また受難の苦悩を体験し、聞くも怖い難行苦行の末、1510年に死んだ。その死骸はすべての者が見ることのできる不腐の状態で、いまだにジェノヴァにある」（田辺貞之助訳，国書刊行会刊，p. 228）。
- (32) 以下この本からの引用は、笹谷道雄訳『煉獄論』（ドン・ボスコ社刊，昭和25年）による。漢字と仮名遣いは、最近の慣用に改めた。
- (33) Suzanne Toulet: *Le Tourment de Dieu dans l'œuvre autobiographique de Julien Green*, p. 106.

- (34) この詩からの訳は、Charles Moeller の前掲書、370ページに引用された仏訳による。
- (35) J. Juijterwaal: *Julien Green, personnalité et création romanesque*, p. 80.
- (36) *Ce qu'il faut d'amour à l'homme*, p. 124.
- (37) 原文はイタリック。また、『パンフレット』からの訳文は、拙訳「フランスのカトリック信者への訴え」(雑誌「流域」(青山社刊) 1～9号)による。
- (38) 「あまりに心ひかれるために、かえってポール・ロワイヤルとたたかっているのではないか、とよく自問したものだ」(51-6-7), 「私はいくらかこの方向に進んでいくような気がする。だが、私はこの魅惑に心を許せない」(51-7-8), 「ポール・ロワイヤルは、青年期のすべてを通じ、一種のブレーキとして私に働きかけていた」(58-11-16), など。
- (39) Julien Green et Jacques Maritain: *op. cit.*, p. 82.
- (40) Charles Moeller: *op. cit.*, pp. 362-363.
- (41) Julien Green et Jacques Maritain: *op. cit.*, p. 71.
- (42) Charles Moeller: *op. cit.*, pp. 343-344, 373.
- (43) さきに引いた 70-10-5 の発言のほか、64年 2月20日のマリタンあての手紙のなかで——「透明な形で、これはすべて私の神への復帰の物語です」。さらに最近刊の日記『世界の光』の80-5-28においても。
- (44) 38-4月, 41-1-11, 41-2-28など。
- (45) René Nelli: *Erotique et Civilisations*. ルネ・ネリ (有田・渡邊訳)『エロティックと文明』(紀伊國屋書店) p. 114.
- (46) ほとんど同じ言葉が、イグナチウス・デ・ロヨラを扱った戯曲『イニーゴ』にもある(Ⅱ, 1198)。
- (47) Jacques Petit: *op. cit.*, p. 83.
- (48) *Partir avant le jour*, V, 670.
- (49) むろん、この小説が検討を要しないというのではない。『モイラ』のジョゼフが自分の救いのために女を殺すのに反して、ウィルフレッドは自分を撃った男をゆるしながら死ぬ。また『他者』は一面、凡庸な男ロジェに導かれたカーリンが神に至りつく過程であるが、『人はみな夜にあって』においても、ウィルフレッドといういってみれば平凡な青年の周囲に、救いを求めて人々が寄り集うのだ。『人はみな夜にあって』は『モイラ』と『他者』の中間に位置し、前者にはなかった救いのテーマを後者につないでいくのだといえよう。
- (50) *Ce qu'il faut d'amour à l'homme*, p. 127.
- (51) *Mille chemins ouverts*, V, 978.
- (52) ジャック・マリタン夫妻の霊的自叙伝として、Raïssa Maritain: *Les Grandes amitiés* (邦訳『大いなる友情』水波純子訳, 講談社刊)を参照。

- (53) 本稿の注(9)および(10)を参照。
- (54) 43年の『日記』に「性的なものが抜き取られた」生活を夢見ることが語られた(5-2)あと、出版時にわざわざ注記して、性本能はときとして人間の精神的な活動にとって力の源泉となりうるのだ、と訂正を加えているところがある。性本能が憎むべき災いか、容認すべき必要悪あるいは原動力かは、ジャック・プチの注釈の通り(Ⅳ, 1646)、グリーンが結論を得ない大きな課題である。
- (55) Jacques Petit: *op. cit.*, p. 43.
- (56) Antonio Mor: *Julien Green, témoin de l'invisible*, pp. 84-85.

[付記] グリーンの作品で既訳のあるものは、引用に際して使用させていただいた。訳文を多少改変した場合のあることをおことわりしたい。